

第27回 全国読書作文コンクール 優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会

平成二十九年度第二十七回全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

「看取り」を経験したからこそ

大沼まこ（小五）

人も動物も皆、生きている限り、少しづつ年をとり、いつかは最期を迎える。その最期をどう迎えるかは、まさに「命の尊厳」に向き合うことでもあるのだと心から思う。

私のような小学生で、「看取り」を経験したことのある人はそれほどいないだろう。看取りとは、単なる看病ではない。その人が天国に行くまで、そばでお世話をし、見守ること。その人が安らかな最期を迎えられるかどうかは、残された家族にかかってくる。

人は、誰にも迷惑をかけないで死んでいくことは出来ないということを、曾祖母の看取りを体験して私は知った。核家族が多い今、私の家はついこの間まで、曾祖母を含め四世代が一緒に暮らす十人家族のにぎやかな家だった。祖母をおばあちゃんと呼び、曾祖母を「大つきいおばあちゃん」と呼んでいた。めったに風邪もひかない、「人一倍元気」が自慢の人だった。複数の詩吟教室をかけ持ちし、九十歳にして指導者として忙しく駆け回っていた。好きな物を食べ、好きな所に出かけ、好きな詩

吟を教え、「元気」を絵に描いたような人だった。大正生まれの大つきいおばあちゃんと平成生まれの私は、不思議なくらい気が合い、おしゃべりが弾んだ。幼かつた私は、大つきいおばあちゃんのこの元気が、いつまでも続くものだと信じていた。

ところが、少しづつ体力が衰え、歩くのにも杖が必要になつた。病院でみてもらうと、どこが悪いこともなく、「お年ですから」と言われた。足が弱くなると、次第に外出も減り、一人で出来ないことがどんどん増えていった。人は年をとると、今まで当たり前に出来ていたことでも、出来なくなる。その現実を私達家族は、突きつけられる。幼い私にもその辛さが伝わってくる。ついには、誰かの手を借りないと日常生活ができなくなつてしまつた。普通なら、介護施設のような所にお願いするのだろうが、大つきいおばあちゃんは、みんながいるこの住み慣れた家で最期を迎えていと言つた。その願いを叶えようと、私達家族は団結した。在宅医療を支援してくれる先生の力も借りた。まさに梅原先生のような頼りになる存在だった。みんなで役割分担を決め、大つきいおばあちゃんを支えることになった。今思えば、私達のような大家族だから可能だったのだろう。それでも、祖母や母は何かと大変そつだつた。明らかに疲労の色が表れていた。正直私は、いつまで続くのだろうと思つた。でも誰一人愚痴も弱音も吐かなかつた。桜を待ちわびていた大つきいおばあちゃんは、部屋から満開の桜を眺め、眠るように亡くなつた。九十四歳だった。

「看取り」の経験をしたからこそ、梅原先生の伝えたかった「命の尊厳」を、私はしっかりと受け止めることができる。

大つきいおばあちゃんは、私達家族にとって、まさに大きな存在だった。

今回の受賞も自分のことのように喜んでくれていると思います。こうして、曾祖母の事を作文に書き、あの頃を思い出すのも、曾祖母の供養になると思うので、私にとつてもこの「大賞」受賞は、一生忘れられない特別なものになりました。

大賞へ、審査員のひとこと

対象図書名　夜やつてくる動物のお医者さん

現在の高齢化社会の中で皆さんにとつて大事な問題が切実に書かれてます。曾祖母の「看取り」についてとてもしっかりと書かれているだけでなく、曾祖母以外の家族のこともきっちと見ていて、家族で納得していく過程が私たちによくわかります。筆者自身の言葉で書いていることがよくわかるし、読み手に考えさせることを書いてくれていると思いました。理想の家族であろうことが感じられる作品です。

小学生低学年の部・最優秀賞（小三）

みてるよ父ちゃんを読んで

受賞者のひとこと

「看取り」という言葉を聞いてすぐに思い浮かんだのが、曾祖母を家族みんなでお世話した頃のことでした。当時まだ幼かった私は、祖母や母にその頃の様子を詳しく聞いて、この作文を仕上げました。今でも、家族みんなで食卓を囲むたびに、曾祖母のことが話題になります。曾祖母はニコニコしながら私たちの会話を聞いているような気がします。今

新家知磨

「みてて！お父さん」

ぼくが、ようちえんのうんどう会で鉄ぼうのさか上がりがせいこうするのをお父さんに見てもらいたかったことを思い出しながらこの本を読んだ。

主人公のアキヨシは、うんどう会の日、ときようそうで一番になれる自信があつたが、父ちゃんは、しごとがあつたので見に来てもらえなかつた。だから、アキヨシは、がんばつてもしかたないと、母ちゃんに言つた。ぼくもアキヨシと同じ氣もちになると思う。うんどう会のために、一生けん命練習したのに、お父さんに見に来てもらえなくなると、悲しくて、うんどう会に行きたくないと思うだらう。でも、父ちゃんが言つたかっこいい言葉が、矢のようにぼくの心にささつた。

して、ぐつとこらえようと思う。そして、クラスのみんなにも先生のためにおいてつだいをしようとよびかけたいと思う。先生がよろこんでくれる顔をそぞろするとワクワクしてきた。

先生の赤ちゃんが元気に生まれてくる日を楽しみにしながら、ぼくが出来るごとをたくさんみつけておてつだいをしようと思う。

樹象図書名
みてろよ！父ちゃん！

受賞者のひとこと

コンクールで最優秀賞を取ったと聞いてすごくびっくりしました。

「これ、ぼくがやつたんだよ。」
と言つてしまふからだ。でも、これからは、いいことをする時は、だれにも言わずにできるようなかつこいい人になりたい。では、今のぼくにどんないいことができるかなと考へてみた。

もともとぼくは作文が得意ではありませんでした。でも、「がんばれ父ちゃん」を読んだときに「父ちゃん」がすごくかっこいいと思いました。「父ちゃん」のようにかっこいい人になるためにはどうしたらいいかを考へて、感想文を読む人にぼくの気持ちがわかつてもらえるように書こ

考えて、感想文を読む人にぼくの気持ちがわかつてもらえるように書こうと思いました。

担任の先生は九月からお休みで、十一月に赤ちゃんが生まれるそうです。先生とおなじ元気な赤ちゃんが生まれるといいなと思います。

ほくの学校のたんにんの先生は 今 おなかの中に赤ちゃんがいる
だから、ぼくは、先生のためにおてつだいができることがあるのではな
いかと考えた。たとえば、先生が重い物を持つていたら、自分からすす
んで持つてあげたいと思う。その後、今までのぼくなら、家に帰ると、

「今日、先生のおてつだいしたよ。」

とじまんしたくなるだろう。でも、アキヨシの父ちゃんの言葉を思いだ

小学生の部・最優秀賞（小四）

なみだの穴が来る前に

竹 本 鳴 泰

うれしいなみだ、悲しいなみだ、なみだの穴つてどっちなのだろうと気になった。時間の流れが反対になつている不思議な本だなあと思つたら、最後まで一気に読んでしまつた。どの話も全部どこかでつながつていた。出てくる人はみんな色々な事をがまんしたり、一生けん命がんばつていた。だから心が風船みたいにふくらんで、パンパンになつて、ひびが入る。最後には、破れつしそうになる。その時、どこからか不思議な穴がやつてきて、なみだがあふれて止まらなくなる。穴は掃除機のようになれるし、前に進んで行けた。

なみだの穴はなぜ、なみだをこらえている人の所へ行けるのだろう。

あ、そうか。人はみんな見えない糸でつながつてゐるんだ。その糸が心を通つてゐるから、なみだの穴が必要な人の所へ飛んでいけるんだ。ぼくはどうかな。まだなみだの穴は、来てないと思う。けれど、なみだをこらえたことはたくさんある。たとえば、逆上がりができない時、ゲームで負けた時、いやな言葉を言われた時だ。そのたびに、心に傷がつて、テープでとめる。ぼくの場合、楽しいことをすると、きずがよくな

つて、テープをゴミ箱に捨てられる気がする。それに、家族に言うと、傷を包んでくれて、温かくなつて、悲しい気持ちがなくなる。だから、ぼくの心はパンパンにならないし、なみだの穴もこないんだ。でも、少し心配になつてきた。もしかして、ぼくのなみだはお母さんにたまつているのかもしれない。そう思つたら急に、ドキドキしてきた。そういえば、泣く時もおこる時もわらう時も、全力投球なお母さんだけれど、最近のお母さんは静かだ。座つてているところなんて見たことがなかつたのに、たまに横になるし、体中にシップがはつてある。もしかしたら、家のすぐそばに、なみだの穴があるのかもしれない。見えないからこわいな。その瞬間、ぼくはお母さんにハグをしていた。少しおどろいたお母さんは、ニコッと笑顔になつた。よし、この調子でお母さんのなみだの穴を追い出してやる。ぼくが絶対に、お母さんを守るぞ。

この本を読んで、がんばる事は大事だけれど、がまんはしすぎないことを心がけようと思つた。

受賞者のひとこと

対象図書名　なみだの穴

ぼくは、三年生の四月から塾に通つてゐます。作文を出すのは今回が二回目で、去年は優秀賞までいきました。選ばれるとは思つていなかつ

たので、びっくりした気持ちと、表彰式まであと一步の所で選ばれなかつた残念な気持ちが半分半分でした。今回最優秀賞までいったと聞いたとき、「ついにやった」と、心中はうれしさでいっぱいになりました。初は上手に書けませんでした。自分の思いを沢山紙に書き出して、その中からぼくの強く伝えたい気持ちを選んで作文にしました。表彰式は佐賀県で、うれしい気持ちもありましたが、「行ったことがない所だし、みんな見ているので失敗しないかドキドキするなあ。」と不安です。でもこの本から不安な気持ちをためない方法を知ったので、今は大丈夫です。式の日を楽しみに待っています。

小学生の部・最優秀賞（小五）

かくされた気持ち

森脇美友貴

なみだの穴なんて、あるはずがない。この本を読み始めたとき、私はそう思つた。なみだの穴は、泣くのを我慢している人のところに流れてきて、なみだを流させる不思議な穴だ。しかし、そんな夢のような穴があればいいなど、本を読み進めていく内に、そう思うようになつた。

私は小さいころは、よく人前でも泣いていたと思う。しかし大きくなるにつれ、人の目を気にするようになり、我慢することが多くなつた。それは、成長したとも言えるが、自分の本当の気持ちをかくして生きているといえる。この本の登場人物のように、笑つていても心の中では泣いていたり、平気そうな顔をしていても深く傷ついていたりと、人は大人になるにつれ、本当の感情を素直に表わせなくなつていくのだと思う。そのようにして我慢したなみだがたくさんたまつていき、あふれた時に、なみだの穴は現れるのだと思う。

私も時々、まるでなみだの穴を見てしまつたかのように大泣きすることがある。それは、家族もおどろいて、もう泣かないでと言うくらいの大量のなみだだ。泣いた後は不思議なほどスッキリしている。ということは、なみだの穴は本当にあるのかもしれない。

私も、この本の登場人物などのように、泣きたいのを我慢することがある。例えは、勉強で、難しい問題があつた時、なげやりな態度をとつてしまつたら、母に叱られて思わず泣きたくなることがある。しかし、すぐに泣いてしまうと、本当に反省していないと、母に思われるのではないかと考えて、なみだをこらえている。他にも学校で理不尽なことを

クラスメートに言われた時も、泣きたくなる。だが、泣くとその相手に負けたことになるので、グッと我慢している。そんな時、私は心の中では、とても悲しい気持ちになつていて。この我慢したなみだは、どこに行くのだろう。私は、なみだの穴に吸い込まれていくのだろうと思つた。私は小さいころは、よく人前でも泣いていたと思う。しかし大きくな

るにつれ、人の目を気にするようになり、我慢することが多くなつた。

それは、成長したとも言えるが、自分の本当の気持ちをかくして生きているといえる。この本の登場人物のように、笑つていても心の中では泣いていたり、平気そうな顔をしていても深く傷ついていたりと、人は大人になるにつれ、本当の感情を素直に表わせなくなつていくのだと思う。

そのようにして我慢したなみだがたくさんたまつていき、あふれた時に、なみだの穴は現れるのだと思う。

私だけではなく、他の人も自分の本当の気持ちを我慢しているのだろうと思う。怒っている母や、私に文句を言つたクラスメートにも、かくしている感情があるのかもしないと思うようになつた。母は、あまり感情を表に出さない。一度、母に「どうして、なみだを流さないの。」と聞いたことがある。その時母は、「一度泣いてしまうと、そのままなみだが止まらなくなりそうで怖いから。」と答えた。それで母にも、かくしていの感情があつたのだと気付けた。そうすると、私に文句をいつてきたクラスメートも許せるようになつた。

これからは、人の表面の感情にとらわれるのではなく、かくしている本当の感情に気付いてあげられる人になりたいと思つた。

小学生の部・最優秀賞（小六）

自分の気持ちを表に出そう

四 本 瑠 海

対象図書名 なみだの穴

口から声を出すということと、自分の感情を表情で伝えること。どちらも、大切なことの一つだ。

私は、塾の先生に、受賞を知られたとき、とても驚きました。まさか自分の作文が選ばれるとは思つていなかつたからです。

この作文を書いた時、私は塾の夏期講習中で、塾に行つてない小学生の同級生がうらやましかつたです。楽しそうでいいな、私は勉強したり、テストを受けたりしていいるのと思つてしました。ですが、この本を読んで同級生たちにも、表には出せない辛いことや悲しいことがあるのかもしれないと考えられるようになりました。自分の中にある嫉妬や怒り

など、マイナスの感情が軽くなつたように思います。最初は「なみだの穴」なんて、ただの想像だと思つて読んだ本ですが、この本を読むことができて良かつたです。これからも「なみだの穴」のように、自分の考えを、改めさせてくれるような本に出会いたいと思いました。

逆のこともある。何か、うれしい時や、成功した時に、ついつい「やつたー。」や「よっしゃー。」など、勝手に口から言葉が出てくる時は、ないだろうか。ゲームで勝った時などは、まだやりたいという気持ちに、なるだろう。そうやって、口から言葉を出すことで、人に自分の気持ちを伝えることができるし、心の中で喜ぶより、喜びが倍になると思う。

喜ぶということは、もっと上を目指すために、やる気がわいてくる。そうやって、人は上へ上へと成長していくのだろうと私は考える。

他にも、「人は泣いて成長する。」という言葉を聞いたことはないだろうか。私は、祖父から、この言葉を習った。この言葉を耳にした時、疑問に思つた。「人は泣いて成長する。」ではなく、「人は笑つて成長する。」のではないかと、今考えると、どちらも正解だと、私は思う。新田選手も、ぼくに、何が足りなくてメダルが、とれなかつたのだろう。でも、今だから分かることが、できるんだと。メダルを目の前に、あそこで転んだから、自分の心と体は成長できたと語つてている。

また、泣く時は、ただ流れで泣いているわけではないと思う。私は、毎回、原点に戻つて、何がいけなかつたのか、反省をしている。反省と言つたのだろうか。

その考え方とはちがつて、その時の私は、笑うということは、おたがいに、喜びを分かち合い、みんなで成長することができると考えた。なの

で、「人は笑つて成長する。」のではないかと感じた。どちらも、生きる上で、大切なことだと言える。

なぜなら、人間は感情を持っている動物だからだ。感情はコントロールすることができる。コントロールすることで、自分の個性を發揮している。まさに、十人十色だ。

新田選手も、たくさんの仲間と出会い、笑い、泣き、怒り、悲しんだことが大切な宝物だと言つていて。自分の気持ちを、上手く表現することで、もっと世界が明るくなる。

受賞者のひとこと

対象図書名　不可能とは、可能性だ

私が、「最優秀賞を取つた」ということを聞いた時は達成感や、嬉しさ、驚きなど、さまざまな気持ちが重なつていて、声が出なかつたぐらい、興ふんしていました。

そこで、作文を書いて思つたことや、気づいたことが、いくつかありました。

一つ目は、「不可能とは可能性だ」を読む前と、読んだ後の大きな、気持ちの変化です。読む前は、文字が小さい上で、多いし、ページ数が大きかつたことから、そこまで興味はありませんでした。でも、実際に読んでみると、新田選手の考え方と同じ部分があつたり、新田選手の熱い

心情で、読み終わる区切りがつかなかつたです。ここで、この本の主人

中学生の部・大賞

公・新田選手の積極的で、あきらめない性格だからこそ、自分の思いをしつかり持つて、伝えることができる人だろうと思い、自分の気持ちはしつかり伝えようということを、テーマにした作文にしようと思いまし

た。

この機会を通して、自分の気持ちを持つこと・伝えること・考えてみるということの大切さを、この作文で、より多くの方々に知つていただきたら嬉しいです。

当たり前なんかじゃない

金 岡 勇 磨 (中二)

僕には、一つ違ひの姉がいる。幼稚園、小学校、中学校と同じ学校に通つてはいるので、周りの友だちや先輩たちからも、「えつ、二人は姉弟なのか」と、よく言われる。周りがそう言うので、僕は知らず知らず、姉を意識してしまつてはいるのかもしれない。僕が姉の弟としてこの世に生まれてきた時、僕は千八百五十六グラムしかない低出生体重児であつた。約二か月間、N I C Uと言う病棟の保育器の中で育てられ、生まれて二か月も家族と離れて暮らしてはいた。そしてようやく、僕が姉と対面できた時、姉は二歳の誕生日を迎えていた。低出生体重児だった僕は、退院してからも、いろいろと規制があつたらしい。たとえば、弱視にならないうように、直射日光に当たつてはいけなかつた。だから、一日中、部屋の中で過ごしてはいた。僕につきつきりの母は、当時、外遊びをしたくてたまらなかつた姉に、「弟のために我慢してあげてね。」と言つたそうだ。それから、僕は肺機能が発達していなかつたので、担当の医師から、「できるだけ泣かさないようにしてください。」と言われていたらしい。だから、母は僕が眠つてはいる時は、姉とできるだけ静かにしていたという。

まだ二歳になつたばかりの姉は、僕に母親を奪われた上に、外にも遊びに行けず静かにするように言われて、どんな気持ちだつたのだろうか。その頃の事を、母は時折僕に話をしては、「お姉ちゃんが居てくれて、よかつたね。」と言う。

この本に登場する、姉のミラと弟のザック。ミラが弟を想う気持ちの深さに感動するとともに、僕も自身の姉を誇らしく思いながら、本を読み進めた。

スキリー・ハウスという児童養護施設には、いろいろな問題を抱えた子どもたちがいた。何より僕の心に残つたのは、その子どもたちが家族を必死に追い求めていたことだ。僕は今まで、家族は居て当たり前のように感じていた。僕にとって家族とは何だろう。改めて考えてみた。僕は今、卓球部に所属している。強くなりたいと思い、一生懸命に練習しているが、勝てる日ばかりではない。うまくいかなかつた日は悔やしさもあり、家に帰るのもわざわざ感じることもある。しかし不思議なことに家族と居ると、また元気を取り戻すことができた。決して小学生の時のように、学校であった事を家族にあれやこれやと話すわけでもないのに、心の緊張が緩んでいく感じがして、家族はまるで、僕の充電器のようだと思う。人にとって家族とは、体だけではなく心の居場所なのではないか。そんな居場所を、ミラとザックの姉弟やスキリー・ハウスで暮らす子どもたちは、探し続けていたのだろう。

スキリー・ハウスの院長であるミセス・クランクスのことを、ミラは

冷たい人だと感じていた。しかしその冷たさは、愛した子どもたちとの別れの時に感じる辛さを、少しでも少なくするために、ミセス・クランクスがとつた行動であつたのだ。

僕にもこんな経験がある。それはまだ僕が小学校低学年の頃、一人で宿泊学習に参加した時の事である。同じ班には、県内のいろいろな小学校から集まつた人たちがいて、初めて会う人ばかりであつた。六年生の一人の男の子は、みんなで活動していてあまり話すこともなく、僕は少し苦手だと感じていた。しかし、その日の夜、その男の子と部屋で二人だけになる機会があり、勇気を出して話しかけてみることにした。話をしていくうちにその男の子も僕と同じように、初めて一人で参加した宿泊学習に、不安な気持ちで一杯であるのだとわかつたのだ。お互いの気持ちを話したことで、宿泊学習が終わる頃にはその男の子と僕は、一番の仲良しになつていた。目の前に居る人の行動を、どのように感じるかは分からぬ。しかし、その行動の裏にはどのような事情があるのか分からぬという事を考えながら、人と接する事が必要だと思う。

自分が子どもの頃過ごした児童養護施設で自分と同じように家族のいない子どもたちの世話をしようと決めたミセス・クランクスのことを素晴らしい人だと僕は思う。僕も、もう十三歳。十年後には仕事に就き、社会のために働いている年齢だ。その時、僕も彼女のように、自分の経験の中からやりたいと思う仕事を見つけたいと思つてはいる。そのためには、恐れずいろいろなものに挑戦していく勇気を持ち続けたいと思う。

そして何よりも、そんな僕を精一杯支えてくれている家族に感謝の気持ちを忘れずに、今ある事が当たり前だと思わずに、一日一日を大切にしていきたい。

に表すことの素晴らしさを知ることができた。その作文を評価していただき、名譽ある賞を受賞できることに感謝し、これからも、たくさんの本に触れ、心を磨き続け、自らを輝かせていきたいと思う。

対象図書名 青空のかけら

中学生の部・最優秀賞（中一）

大賞へ、審査員のひとこと

自分の中に満ちてきた思いが堰を切ったようにわき出しています。自

分の言いたいことをまず言わないと、という思いがあつて、それがとて

も新鮮に感じました。表現も魅力的でテーマも深く多岐に及んでいます。

すべてそれらを自分で引っ抱えていく、というエネルギーを感じました。

ひとつひとつを整理すれば、まだまだ書けると感じます。

受賞者のひとこと

愛をつないで

川合杏奈

自分では抱えきれない程の辛さを抱え込んだ時、人はそこから逃げたいと思うだろう。その苦しみを忘れるために、何かにすがろうとするだろう。自分の居場所を求めて。俊はゲームの中に逃げ込んだ。ネットに夢中になることで、弟のことを忘れようとしていたのだと思う。このまではダメだと自分で分かっていても、どうにも出来ずに苦しんでいた俊の気持ちが、私には痛いほどよく分かる。

自分のせいで誰かが不幸になつてしまふのは、自分が直接痛みを受けるよりも、はるかに辛いことだと思う。俊の場合、自分の投げたボールのせいで弟が事故にあり、亡くなつたのだから、自分を責めずにはいられないかったのだろう。自分のせいで家族がバラバラになつてしまつたとは人生を面白くすると思う。

また、本を読み自分の生活を振り返り、心で感じたことを素直に言葉

思い込んでいたのだから。いつのこと、自分が犠牲になれば良かったのにと、泣きじやくつた場面では、私も思わずもらい泣きをしてしまつた。私の妹の事件と重なつたからだ。

私は四姉妹の三女として生まれた。二人の姉達とは年が離れているので、私が生まれた時は両親はもちろん、姉達からも大いにかわいがられた。みんなの愛情を一身に受け、常に家族の中心にいたのはこの私だつた。その幸せがいつもでも続くものだと思つていたが、五年後、妹の誕生によつて全く違う空気になつてしまつた。みんなの関心は、いとも簡単に私から、生まれたばかりの妹に移つてしまつたのだ。その時私は、「お姉ちゃんになる」喜びより、末っ子の座を奪われる寂しさの方が強かつた。正直私は、ずっと末っ子でいたかった。「お姉ちゃん」になんか少しもなりたくなかった。誕生した妹の小さな動き一つ一つに、みんなが笑顔になるのを横目で見ながら、私だけが素直に喜べずにいた。

そんな私の心を知らない妹は、私にいつも笑顔を見せてくれていた。

私にいつも優しかつた。よちよち歩きが出来るようになつてからの妹は、私が落ち込んで泣いていると、小さな手で私の涙を何度もぬぐってくれた。小さな手で私の頭を何度もなでてくれた。私の顔をのぞき込んで、笑顔で私を慰めてくれた。いつも優しさにあふれ、私の小さな妹はまるで天使のように愛らしかつた。その天使の笑顔に私は何度も救われ、元氣をもらうようになつた。いつのまにか、いじけていた私の心も妹によつて清められていつたのだった。

心を入れ替え、姉らしくしようと思つていた矢先、二歳になつたばかりの妹に大変なことが起きた。最初は風邪ぐらいにしか思つていなかつたが、高熱が続き近くの病院に入院することになつた。治るどころか、症状が悪化するばかりで、その病院では対応しきれなくなり、さらに専門の病院に移ることになつた。救急車に乗せられた苦しそうな妹を見た時、私は恐怖で押しつぶされそうになつていて。普段よく目にする救急車は、今まで他人事でしかなかつた。まさか自分の妹が運ばれていくなんて考えてもみなかつた。一体、妹はどうなるのだろう。私には、ただただ不安と恐怖しかなかつた。

検査の結果、難病と言われる「川崎病」と告げられた。全身の血管で炎症が起きて発症する病で、治療も難しいといふことだつた。面会謝絶の状態が長く続いた。なぜ原因不明の病に妹がならなければいけなかつたのか。妹がこんな事になつたのは、全部自分のせいだと思つた。私が妹の誕生を素直に喜ばなかつたから、妹がこんなひどい目にあつてしまつた。悪いのは私なんだ。俊と同じように、毎日自分を責めていた。妹ではなく、私が病気になるべきだつたのにと、責め続けていた。もし、妹がもう二度とこの家に帰つて来なかつたらどうしよう。悪い事ばかり考えて、私は誰にも心を打ち明けられずに、泣いてばかりいた。俊のよううに、それを忘れるための逃げ場所も私にはなかつたのだ。

ようやく面会が出来るということで病室に行つた私は、妹の姿を見て打ちのめされた。そこには、手足の皮が赤くむけ、ガリガリにやせた、

見るからに弱々しい妹が横になっていた。変わり果てた妹の姿に、私は言葉も出なかつた。神様は、かけがえのない妹の存在に気付かせようと、私にこんな試練を与えたのだろうか。今もそう思わずにはいられない。俊のおばあちゃんの言葉が忘れられない。「人は皆、愛されるために生まれてくるんだよ。」——確かにそうだ。俊も弟も、私も妹もみんな。自分がみんなに愛された分、その愛を今度は妹や弟に注いでいく。その順番が当たり前なんだと、今なら素直に思える。

今、私の妹は小学二年生。元気に学校生活を送つてている。時々私に生意気なことを言うようになった。そんな、どこにでもある当たり前のことが、とても嬉しく思えてくる。

もう、弟に会えない俊の分まで、私は妹を守つていいこうと思つていて。姉として。

受賞者のひとこと

対象図書名　ケンガイにつ！

中学生の部・最優秀賞（中二）

約束したはずだった

千 田 陵 太

小学二年生で入塾した私は、毎年このコンクールに参加してきました。賞の大小にこだわらずに全力を尽くすこと。それが先生の方針なので、誰もが一生懸命考え、がんばるのが当たり前という環境にあります。この恵まれた環境の中で、先輩たちの活躍に刺激を受け、自分自身も成長できただように思います。これまで三年連続で「優秀賞」をいただ

けたのをとても光榮に思つていてました。でも、毎年のように上位の受賞者がいるセミナーの中で、やはり私もいつかは大きな賞が取れたらとう気持ちもありました。今回、念願叶つて「最優秀賞」をいただくことができ、うれしさと達成感でいっぱいです。

両親はもちろん、今回の作文の中心人物である妹も、この受賞をとても喜んでくれました。作文を仕上げるまでには、悩み考える時間も多いけれど、今、それも含めて文章を書くことが楽しいと言い切れる自分がいます。これからも大いに本を読み、のびのびと作文を書いていこうと思ひます。いつも情熱あふれる指導をして下さる先生と、刺激を与えてくれるセミナーのみんなに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

「いつまでやつてんの。いい加減にしないと没収するよ。」

毎日のように我が家に響き渡る母の怒鳴り声である。勿論僕に言つてゐる言葉で、僕が言わせてしまつてゐる言葉である。僕は中学入学と同時に

らいに、数々の約束をさせられて、やつとの思いでスマホデビューをした。

①部屋には持ち込まず、リビングで使用する。

②時間のルールを守る。

③成績が落ちた時は取り上げる。

約束はした。でも正直今思えば、スマホを手に入れる為の約束であつて、守れると思っていた約束ではなかつた。そんな中でも最初の頃は、取り上げられない様に母の顔色を伺うかの様に約束は守つた。約束を守る事が、スマホを守る事になつてからだ。それが二年目になる今では、リビングで使いはするが母の声が騒音でしかないのでイヤホンを使用している。母が話しかけてもすぐに返事はしないし、聞き返して怒られる事もある。そろそろ母も本気で怒つて来る頃かもと感じる事も多い。僕も彼とまではいかないが、依存症なのかもしれない。依存症だと言われても、口では否定するが、心では否定出来ないのだ。

スマホデビューをする前の修学旅行の時を思い出した。あの時は、早く家に帰りたい。早く帰つてご飯が食べたい。ベットでゆっくりと寝たいと思いつながら帰つたはずだつた。それがスマホデビューをした今では、母の「おかえり。ご飯食べて早く寝ないとね。後で色々話を聞かせてな。」なんて言う声をスルーして、自分の部屋にスマホを取りに行く。帰つてお腹はすいているが、ご飯でもなく、疲れているが、寝る事でもなく、何よりも先にアプリゲームをしたかった。彼と同じように、僕がスマホ

が使えない環境に行くなんて考えられない。一日でも絶えられないと思う。きっと僕だけではない。僕の周りの友達もほとんどがスマホを持っている。毎日寝不足の友達、遅刻する友達、テスト前に没収され文句を言う友達、そんな僕達が、彼と同じ様な経験は出来ないだろう。夏休みを利用してやれと親に言われたらと思うと恐怖でしかない。彼は嫌々行つた田舎ではあつたが、田舎暮らしを経験していく中でゆっくりではあるが変わつていつた。スマホ、パソコンなんて無縁の生活、人は当たり前の生活にあつた物がなくなつても、それなりの生活が出来るんだ。今当たり前にある環境も、自分が当たり前と信じきつていて、決して当たり前ではない。両親が働き買ってくれる物もあつて当たり前なんかではない。もちろん家族がいなくなるなんて考えた事はないが、彼は違つた。彼は小さな弟を亡くすという経験をした。いて当たり前の家族が突然いなくなるなんて誰しもがこの年で経験しない事を経験したのだ。弟の死をきっかけに依存症になつてしまつたが、僕はどうだろう。ただ、楽しいからと自分の欲望を抑えられず、身勝手に甘えた生活を送つていいのだ。あつて当たり前、そこにいて当たり前なんて事は決してないのだろう。今ある毎日に感謝し、優しさであつたり、有り難みを持たなければならぬのだ。

彼は夏休みの田舎生活で、昔の自分を取り戻し、見違える様に変わつた。人との触れ合いで変わる事が出来たのだ。僕は断然今の彼の方が温かみあるかつこいい奴に見える。僕に彼と同じような田舎暮らしは不可

能だが、出来る事もある。

僕は何を守るべきなのかを改めて考えた。三つの約束を守る条件で与

えてもらつたスマホだが、今ではスマホを守る為にその約束を覚えて

いるだけの様な気がする。これは違う。まずは、自分が守ると言つた

約束をしっかりと守らないといけないのだ。学校生活でのルールや、決

まりといつた事が絶対だという事なんて、いつからか身についている。

やらないと怒られるからもある。そんな事よりも、自分が守りますと

言つた事を簡単に忘れてしまつていた事を人として恥なればいけない。

この夏で僕は大切な事を思い出せた。約束は守らなければいけないとい

う事だ。

生きる事に向き合う

黒川紗那

中学生の部・最優秀賞(中二)

生きる事に向き合う

黒川紗那

障がい者に対する理解や支援の輪は私達の身近でも少しづつ広がつて

いる。ある日の早朝、茨城県沖での地震の際テレビの報道の仕方に今までと違う変化があつた事に気付いただろか。「つなみ、にげろ」と全て

平仮名で大きく表示されていた。私は何で平仮名なのか母に聞いた。自身も難病と戦いながら障がい者も含めて就職の支援の仕事をしている母

は、色々な法律にも詳しい。大きく表示するのは聴覚障がい者への配慮、平仮名で表示するのは知的障がい者への配慮だそうだ。ちょうどこの年

の四月に施行された障がい者差別解消法の中の合理的配慮にあたるそうだ。合理的配慮とは、障がいのある人が障がいのない人と平等に人権を

受け行使出来る様、個別の調整や変更で柔軟に対応する事だ。行政や企業は可能な限り合理的配慮を提案する事が求められる。

思います。あと一回、読書感想文を書きますが、来年はどんな本に出会えるか今から少し楽しみです。

受賞者のひとこと

対象図書名　　ケンガイにつ！

僕は塾に小学三年生から通っています。毎年読書感想文を書く為だけに、本を読み宿題をこなすだけでした。その上国語も苦手な僕だから、このように審査を進みましたと言わてもまさか最終審査までいき、最優秀賞を取れるなんて思つてもいませんでした。今回の事で色々な方々から「おめでとう」と声をかけてもらいました。僕の人生今まで「おめでとう」は言われる事より言う方が多かつた為、こんなに嬉しく誇らしい言葉であることを知りました。これからはもっと心をこめて使おうと

確かに健常な人と比べると生きしていく上で困難な事に出くわす事は多い。多いと言うよりも困難でない事の方が多い。以前母が股関節の炎症がひどく歩行にくかった際、車椅子で過ごした事があった。スーパーに一緒に行つた時、少し車椅子に座つてみた。興味本位だったが、ほんの十センチの段差でも乗り越えるのに相当腕力がいった。商品をかごに入れるのでさえ、ちょっと高い位置にあると手が届かない。荷物が落ちても取れない。これは大変な事だと思い知つた。

では障がいのある人は弱者なのだろうか。新田選手の周囲は可哀想だと出来ない事に手を借すのではなく、どうやつたら出来る様になるかを考えた。新田選手自身も腕がない事を理由に負ける事を嫌い、努力を惜しまなかつた。そうして夢を掴む事が出来たのだ。本当は言い訳したつていいはずだ。だつて体が不自由な事は事実なのだから。母ももつと休んだつていいはずだ。だつて体調が悪いのは避けられないのだから。でも彼らは決して諦めない。元気な私よりよっぽど強い気持ちを持つて、まさに毎日「全力」なのだ。そんな人を前とて弱者とは言えない。

でもなぜそこまで無理をするのか、なぜそんなに頑張れるのか。なぜみんなそんなに強いのか。

今回の読書をきっかけに母の本音を聞いてみた。するといつもの様に家族がいてくれるからとか、病気に負けるのが悔しいからとはぐらかした。私は「私も十五歳になつて、色々な事を頑張らないといけないけど、本当は何の為になるのか、新田選手や母の様に倒れるまで頑張る理由が

分からぬ。その秘密を教えて。」と真剣に聞いた。私の必死さに観念したのか、母は病気になつた時の事から話してくれた。まだ一歳だった私が抱っこをせがんでも両手首が激痛で抱っこできなくて不甲斐なくて泣いた事、参観日に具合が悪くて見に行けなかつた事、車椅子に乗ると周囲の目線が私にも注がれている気がして申し訳ないと思つた事。そして、大量の薬を飲んでなるべく普通に近い形で生活するのと引き替えにその副作用は骨や内臓をボロボロにしていて、いつその病変が出るか分からぬ事。自分が普通に過ごせる期限があるからこそ、この時間を精一杯生きたい。逆にみんなには元気な体や心があるなら、それを存分に活かした一生にして欲しいと。

障がいや病気だから頑張れないではなく、障がいや病気だから頑張れるでもない。人が自分の状況を見つめ、生きていく事の目標をしつかり持ち、その為の努力を負しまず生きていく。それが強さの秘決だと感じた。

いや、ここではあえて障がいや病気があるからこそ頑張れると言おう。元気な私は生き事がどんなに困難で、どんなに素晴らしいかななど、考えた事もなかつたから。人は困難に直面して初めて元気でいる事のありがたみを感じる事が出来るのだ。私は自分を何も分かつていなかつた。生きるという事と向き合う事を初めて実感した。ちつとも努力が足りない自分、頑張つてつもりの自分が情け無く思つた。

中学最後の独唱声楽コンクール。私は今まで以上に歌つた。徹底的に

研究した。そして、カロラッチョ（イタリア語の愛の歌）を、いつも支えてくれる母の為だけに歌おうと心に決めた。自分の為ではなく。結果は何と、優勝。県中学生で一位。今でも信じられないが今まで一番力の抜けた、最高の歌が歌えた。やつと恩返しが出来たと思ったら、母の顔を見た途端涙が止まらなかつた。

今までにない位努力して必死に向き合ふと結果はもちろん、気持ちも最高に充実してすがすがしい気分だつた。この本に出会え、自分に気付き、もつとがむしやらに、目標を持つて、本気で誰かの為に、前へ前へ。私のこれから的人生、とことん生を感じて生きる事に向き合おうと心に決めた。

対象図書名 不可能とは、可能性だ

受賞者のひとこと

「努力は必ず報われる」そんな言葉があるが、この夏私は身をもつて体験する事が出来ました。私は歌を習つて いるのですが、今まで歌に関してはそんな言葉は嘘だと思うことも多々ありました。でもそれは努力が報われるのであって、私がしてきた事はまだ努力と言えるには足りなかつたのでしよう。今まで夏休みにこの読書作文コンクールに挑戦すること六年、作家審査に三回、最優秀賞一回、最後の年に二度目の最優秀賞を頂く事が出来ました。何度も下書きを書き直した事、何度も読み返

した事、大変な作業だつたけれどやればやるだけ良い文章が出来上がる事が楽しかつたです。私の人生の中で十年後、二十年後も夏になれば、読書感想文を頑張つたと思い出せる経験となりました。この経験を活かし今後の困難も努力で乗り切つていきたいと思います。本当にありがとうございました。

第27回(平成29年度)全国読書作文コンクール
優秀作品集

平成29年10月 発行

発行 公益社団法人 全国学習塾協会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-39-2
TEL 03-6915-2293 FAX 03-6915-2294
E-mail info@jja.or.jp

